

ラドヤード・キプリング

### 3 船宿フィッシャー亭のバラッド

その夜のこと もやい鎖の間を  
両目を見開いた死体が波間にゆられていた  
ガーデン・リーチを下って  
下流のケジャリーで腐るのだ  
フーグリ川が魚の群に語った話を  
その雑魚の群れがまた私に語ってくれた

フルターの船宿フィッシャー亭は  
船乗り相手の宿  
米国はミシシッピ川から英国はクライド川まで  
あらゆる港から来た水夫たちの常宿  
派手に噛み煙草の唾を吐き散らし パイプをくゆらし 5  
語るは愚にも付かぬ大ボラばかり

ほとんど稼ぎにもならない  
紅い海のことを語ると思えば  
みなそこ水底の竜宮城のことを語り  
果てしない天の星々のことを語る 10  
赤いはずが黒く濁ったラム酒を  
あまりに多くあお呷ったせいだ

難破し難儀したことを語る  
人に言えぬ恥 肉欲にイカサマ博打ばくちを語る  
話の山場で出るのはきまって 15  
天から業火と硫黄が降り 焼きつくされる話  
そして飛び交う威勢のよいたんか啖呵と  
食卓をどんと叩く音

ここにハンスなるへきがん碧眼のデンマーク人がいた  
牡牛のような首 むき出しの腕 20  
毛深い胸に下がるは

恋人ウルトゥルーダのくれたお守り  
人から <sup>わざわい</sup>禍を遠ざけるための  
小さな銀の十字架

宿にはほかに耳なしジェイク 25  
マレー人パンバ

ギニアの料理番カーボイ・ジン  
ヴィーゴ湾のルーズ  
それに 船乗りらにあれこれ売って巧く給金巻き上げる  
正直者で名を売るペテン師ジャック 30

セイレム・ハイディカーなる男がいた  
そいつは痩せたボストン人  
ロシア人にドイツ人にイングランド人 混血人にフィンランド人  
ヤンキーに デンマーク人に ポルトガル人  
これが船宿フィッシャー亭で  
航海の疲れを癒す船乗りたちだ 35

紅一点はオーストリアのアン<sup>あねご</sup>姐御 ちゃっかり酒のご相伴  
宿主コリングはその素性を先刻ご承知  
ガリシアはタルナウ出のこの女  
ジョウン・バザールまで流れてきたが 40  
卑しい<sup>なりわい</sup>生業でパンを食らい  
花代を稼ぐこの<sup>ばいた</sup>売女

女にかしづく野郎は数あまた  
巻き上げた高価な獲物をみな女に貢ぐ  
下着にガウンに指輪にネックレス 45  
数えきれない客からの頂きもの  
港の<sup>おきて</sup>掟じゃその週は 誰もが知るところ  
女はセイレム・ハイディカーが独り占め

<sup>おか</sup>陸の男ならとくと知る世の習い 悲しいかな海の男はご存知ない  
どんなに金を積まれても 50  
消せぬは恋の炎と  
迷い込むのは恋の闇路よ  
<sup>あねご</sup>姐御が<sup>へきがん</sup>碧眼ハンスに

いるめ  
秋波を送っていたとは

ハウラーからベンガルまで 55

船乗り稼業はつらいもの 切った張ったは常のこと  
夜明けを待たず 仏になる奴もいるだろう  
フルターの船宿フィッシャー亭で  
日がな一日大酒食らい  
好き放題に女を口説くやつの天罰さ

60

へきがん  
碧眼のデンマーク人ハンスは堅物だった

牡牛のような首 むきだしの腕して  
胸を震わせ姐御かかたいしょうに呵々大笑

その胸の下に振るえるはウルトゥルーダの贈物  
人をわざわい禍から遠ざける  
小さな銀の十字架

65

「あんたセイレム・ハイディカーの相手しなよ  
奴のれこだったってこと 俺ちゃんとして知ってたんだ  
いいかい 俺は明日船出だ  
スカーゲン岬を回り  
ヘルム島からカテガット海峡を南くだに下って  
サイローのベッサーまで行くのさ」

70

袖にされた恋心は 憎悪に変わる  
南無三 ハンスよ

「あんたセイレム・ハイディカーの相手しな」  
このひと言で女はキレた  
金切り声に悔し泣き 「よくも言ったわね」  
それから刃傷沙汰が始まった

75

「貴様覚悟しろ」とセイレム・ハイディカー  
階段から響く金切り声  
壁に踊る乱闘する男たちの影  
気づかぬうちにドスの一刺し  
壊れた椅子の間に  
牡牛の如く倒れるハンス

80

姐御の震える腕に 85  
ぐったりハンスは倒れ込む  
「俺 明日出かける  
サイローのベッサーまでまっすぐに  
そこにウルトゥルーダが来てくれる  
復活祭にはきとなあ ほんじゃまあサイナラ 90

「南さしてさあ カテガット岬まわって あれっどうした  
何にも 見え や し な い」  
ハンスのつぶやきは止まった 魂は飛んでいった  
オーストリアの姐御は泣いた  
フルターの船宿フィッシャー亭で 95  
偉丈夫ハンスは死にしまっただ

かくて碧眼<sup>へきがん</sup>のデンマーク人ハンスは殺<sup>や</sup>られ  
牡牛のような首 むきだしの腕したやつはお陀仏  
だがオーストリアの姐御<sup>あねご</sup>はちゃっかりいただいた  
恋人ウルトゥルーダの 100  
小さな銀の十字架を  
人を禍<sup>わざわい</sup>から遠ざけるはずのお守りを

(榊井幹生訳)